

# 聴覚障害者のアイデンティティ形成に関する検討

藤嶋桃子 (愛知教育大学大学院特別支援教育科学専攻)  
岩田吉生 (愛知教育大学特別支援教育講座)

**要約** 聴覚障害者のアイデンティティ形成に関する研究は、我が国でも多く行われてきた。これまでの研究より、聴覚障害者が形成するろうアイデンティティは、健聴者と聴覚障害者との世界の葛藤や混乱、聴覚障害者の世界への没頭等のいくつかの段階を経て形成されることがわかっている。また、これに影響する要因として教育歴やコミュニケーション手段の違い、同障者との出会いが大きく取り上げられてきた。しかし、これまでは「ろう者」か「健聴者」かの二者択一でアイデンティティが形成されていると考えられており、「難聴者」としてのアイデンティティは境界上の第三者的存在として考えられてきた。高性能の補聴器や人工内耳を装用し聴覚活用にて言語理解が可能な難聴者が増える中、実際に健聴者世界との葛藤を乗り越え、「難聴者」として肯定的に自己を形成している人がいるという事例から、今後は難聴者のアイデンティティについても検討するべきであることが考えられた。

**キーワード** : アイデンティティ形成, ろう, 難聴

## 1. 聴覚障害者のアイデンティティ形成の研究の背景

### 1-1. アイデンティティ形成の研究

Erikson は、人の発達を乳児期から老年期の 8 期に分け、各段階で社会から求められる課題を乗り越えられることでパーソナリティが発達するとし、「ライフサイクル論」を提唱した。各段階では、課題に成功したり、失敗したりして心理的危機を乗り越えることで課題を達成していくというような自我の特性の獲得が課題であると考えられている。Erikson はこの 8 期の中でも、思春期から青年期にかけての「アイデンティティの形成」を重要視している。

「アイデンティティの形成」について、鱧 (1990) は、Ericson の発達段階における、学童期から思春期への自我の発達を、理想となる教師や親などの周囲への「同一化」から唯一無二の自分を探し求めて他にはいない自分を形成しようとするという変化がみられる時期であるとし、このような自我の発達によってアイデンティティが形成されると述べている。これに対し井上 (1982) は、Erikson のパーソナリティの発達には自我の発達の獲得だけではなく、自分と他者との関係を自他の相互関係によって漸次的に身につけていくプロセスとしても示していることを言及している。また、久保田 (2013) や鳥越 (1999) も、独自の存在としての自分を認識することだけではなく、他者との関係のなかでアイデンティティが形成されると考えている。久保田 (2013) では、「独自の存在としての自分という認識」と「その認識が所属集団に受け入れられていると思えること (社会的受容)」がアイデンティテ

ィの形成に必要であるとし、鳥越 (1999) でも、アイデンティティは「個人内のアイデンティティ (自我同一性)」と「集団へのアイデンティティ」が密接に関連して形成されていくものであると述べている。これらから、アイデンティティの形成は、一人の努力で可能となるものではなく、他者との相互的な関わりのなかで形成されていくものであると言える。

### 1-2. 聴覚障害者のアイデンティティ形成の研究

聴覚障害者とは、聴覚器官に障害があり、聞こえにくさをもつ者を指すが、聞こえにくさの程度はさまざまであり、他者から見えにくい障害である。聴覚障害者は、聴力レベルやコミュニケーション手段、教育歴などさまざまな考え方によって「ろう者」と「難聴者」とに分類されるため、正確な定義づけは難しい。しかし、本稿では、岩田 (2007) の聴覚障害に関する用語を参考に「ろう者」を先天性の聴覚障害者または乳幼児期に失聴した者で 90 dB~110 dB以上の聴力レベルで補聴器による聴覚活用が困難であるため、主たるコミュニケーション言語を手話とする者、「難聴者」を先天性または後天性の失調時期は様々であり、90 dB~110 dB以下の聴力レベルで補聴器による聴覚活用がある程度可能な者や人工内耳装用者が多く、主たるコミュニケーション言語を音声言語とする者として考えることとする。

ここでは、聴覚障害者のアイデンティティ形成を、久保田 (2013) がアイデンティティ形成において重要と考えた「独自の存在としての自分の認識」と「社会的受容」を用いて考えてみる。

まず、「独自の存在としての自己の認識」において聴覚障害児は、自己を認識するうえで聞こえにくい自分としての自己を認識することとなる。幼少期からすでに自分の聞こえにくさを認識していると思われるが、聞こえにくいことに対する認識は親や周囲の人の聴覚障害に対する考え方が影響すると考えられる。小田他(2000)は、このような聞こえにくさに対する本人や周囲の人の理解や認識を「障害認識」といい、これが自己像の形成や社会参加のために重要な認識であると述べており、障害認識を含めた自己認識は聴覚障害者のアイデンティティ形成において重要であるといえる。

次に、「社会的受容」について、聴覚障害児・者ではコミュニケーションの難しさから他者との関係づくりには困難が生じる。とくに、聴覚活用が可能となり、地域の学校で学ぶ難聴者は、健聴者とのコミュニケーションが常に求められる。しかし、聞こえにくさから食い違いや聞き漏らしが生じているため、難聴者が健聴者集団のなかでやりとりをしようとすると、会話の全てを理解できず置いてきぼりにされてしまう。よって、会話についていくためには健聴者の支援が必要となる。しかし、健聴者が常に必ず支援をしてくれるかという点について忘れてしまうことがあり、どうしても聴覚障害者は会話に参加できないことが生じるため、健聴者集団に参加できていない、受け入れられていないと感じてしまう(中野, 2012)。これは「社会的受容」ができていない状態とも考えられる。

このような「障害認識を含む自己認識」と「社会的受容の難しさ」を通して聴覚障害者は、これまでの健聴者との関わりよりも同じ聴覚障害者との関わりを求め始める。しかし、ろう者は地域の学校で学んできた子たちと異なるコミュニケーション方法である手話を堪能に用いており、自分とはまた異なる存在であると感じてしまうこと、これまで健聴者のなかで自身も周りと同じ健聴者だと思って生きてきたことなどから、「自分は健聴者か聴覚障害者か」というアイデンティティの葛藤が生じる。ここでは、難聴者を例に挙げて聴覚障害者のアイデンティティ形成の難しさを説明したが、ろう者にもこのような葛藤は生じる。鳥越(1999)は、ろう者が自己を認識していく際の葛藤として、生まれたときからデフコミュニティに出会っていても、医療機関や教育機関で他者から支援を受けるという経験から聞こえにくさを克服すべきものと認識してしまう可能性があるとして述べており、これらのような健聴の世界と聴覚障害者の世界との心の葛藤が聴覚障害者の自己像の形成を揺らがす要因になっていると考えられる。

### 1-3.聴覚障害者のアイデンティティ形成の研究課題

以上のように、思春期・青年期の「アイデンティティ」の問題は、聴覚障害者にとって健聴者とは異なる

悩みや葛藤が生じる時期である。しかし、聴覚障害者にとってもアイデンティティの形成は、その後の社会参加に向けて重要な課題だと考えられる。

これまでに、我が国では、聴覚障害者が形成するアイデンティティに関する研究が行われてきたが、主としてろう者として形成するアイデンティティに関するものである。本稿ではこれまでの研究をろう者としてのアイデンティティに焦点をあてたものと、難聴者としてのアイデンティティに焦点をあてたものとで大きく二つに分けてまとめることとする。

## 2. ろう者としてのアイデンティティ

### 2-1.ろう者としてのアイデンティティ形成に関する研究

我が国の聴覚障害者のアイデンティティ研究の先駆けとして、山口(1996)と山口(1997)がある。この二つの研究では、「聴覚障害者における健聴者集団と聴覚障害者集団への所属意識の在り方をデフ・アイデンティティと定義し(Weinberg & Sterritt; 1986)、質問紙を用いて聴覚障害者のもつデフ・アイデンティティを検討している。

まず、山口(1996)では、聴覚障害大学生を対象に小学校から高校卒業後まで自分をどのように認識していたかを、①健聴者だと感じる“健聴者同一化”、②健聴者か聴覚障害者どちらか、またはどちらでもないと感じる“同一化混乱”、③どちらかといえば聴覚障害者と感じる“消極的聴覚障害者同一化”、④自覚をもって聴覚障害者と感じる“積極的聴覚障害者同一化”の4つの項目から選択・記述する質問紙を用いて回答を得ている。教育歴について聾学校群、学校変遷群、普通学校群の3つに分けて結果を検討し、地域の学校に通っていた場合、小学校の頃は自分を健聴者と思っいることが多いが、その後自分が聴覚障害者であることを感じていくという変化がみられたこと、聾学校と地域の学校の両方に通った経験のある者は、小学校のときから自分が聴覚障害者であるという認識があるため、自己像にあまり大きな変化はみられなかったことを報告している。

次に、山口(1997)は、山口(1996)と異なる聴覚障害者のアイデンティティ尺度(デフ・アイデンティティ尺度)として Weinberg & Sterritt(1986)のデフ・アイデンティティ尺度と Furth(1973)が指摘する聴覚障害者の孤立した生き方を問う項目・コミュニケーション手段を問う項目をあわせた質問紙を用いて聴覚障害者のもつアイデンティティを検討した。聴覚障害者の世界に生きたいという「聴覚障害者アイデンティティ」、聴覚障害者より健聴者の世界で生きたいという「健聴者アイデンティティ」、聴覚障害者と健聴者

への所属意識が統合されている「統合的アイデンティティ」の3つを聴覚障害者が形成するアイデンティティであることが報告された。しかし、山口(1996)と山口(1997)では、聴覚障害者が形成するアイデンティティについて検討しているものの、ろう文化や手話については触れられていない。

これに対して、ろう文化や手話との出会いをとおして形成する「ろう者」としてのアイデンティティに焦点をあてた研究もある。

伊藤(2008)は、石川(1999)の「エスニック地図」に「聞こえない人」をあてはめ、「健聴者社会とろう者社会との関係」を表している。これによると、聴覚障害者のアイデンティティを4つに分類できる。一つ目は、聴覚障害者のエリートと言われている聴覚補償機器を用いて健聴者社会に同化し、成功した者が形成するもの。二つ目は、手話やろう文化に触れずに健聴者への同一化を試みるが、越えられない壁にぶつかってしまい健聴者社会に排除された者が形成するもの、三つ目は、手話を母語とし、口話法を習得せず、補聴器・人工内耳などを否定してろう社会のなかで生きる者が形成するもの、四つ目は、ろう者として誇りをもちながらも健聴者社会とうまく統合しているものである。このうち、三つ目と四つ目はろう文化や手話と出会った後に形成されるアイデンティティであり、ろうアイデンティティに値することが考えられる。

山口(2001)では、ろう学校に在籍経験が長く、自己をろう者として認識しているろう青年を対象にろう者が形成するアイデンティティの発達過程を検討している。これにより、ろうアイデンティティの発達過程は健聴者の世界との葛藤に直面する「混乱段階」、ろう者との出会いにより健聴者中心の価値観に疑問を持ち始め、ろう者への価値が転換する「出会い段階」、健聴者へ異議申し立てをしたり、同じ聴覚障害者団体へ参加したりしてろう者としての在り方を模索する「没頭段階」、ろう者と健聴者の両方の世界に心地よく関係をつくれるようになる「統合段階」の4つの段階で形成されることがわかっている。

また、海外の研究になるが、鳥越(1999)や甲斐・鳥越(2006)が引用している研究に、Glickman and Carey(1993)のろう者アイデンティティの発達モデルがある。甲斐・鳥越(2006)によると、聞こえない人全体に対し、文化的・民族的アイデンティティの観点から作成したものであり、第一に「健聴者の価値観を無条件に受け入れている段階(健聴段階)」、第二に「努力しても健聴者になることが困難なことに気が付き、自分が誰なのかわからず混乱している状態(境界段階)」、第三に「手話とろう文化という新しい価値を発見し、それに傾倒する段階(没頭段階)」第四に、「健聴者・ろう者の双方の文化的価値をともに肯定的に受容し、バランスよく自分のものにすることがで

きる統合の段階(二分化段階)」の4段階からなる。甲斐・鳥越(2006)は、このモデルと質問紙での調査結果とを比較し、ろう学校高等部生徒のアイデンティティ形成の様相を理解するためにはこのGlickman and Carey(1993)のろう者アイデンティティの発達モデルが重要であると報告しており、このモデルの妥当性も示している。

ここまで、聴覚障害者のアイデンティティに関する研究をまとめてきた。我が国では、「聴覚障害者」としてアイデンティティを形成すると考えた研究に始まり、その後、ろう者として形成するアイデンティティに焦点があてられ、これまで研究されてきたことがわかる。ろう者のアイデンティティの形成過程は、これまでの研究より、健聴者と聴覚障害者との世界の葛藤や混乱、聴覚障害者の世界への没頭等のいくつかの段階を経て、二つの世界を統合する「ろうアイデンティティ」を形成することがわかり、どの研究でも似通ったプロセスを経て「ろうアイデンティティ」が形成されるという報告がされているように思う。

しかし、ろうアイデンティティは聴覚障害者が誰でも形成できるというわけではない。鳥越(1999)ではろうアイデンティティについて、ろう者と出会い、手話を肯定的に受け入れ、学ぶことでろう者をモデルとして肯定的な自己を形成していくと述べている。また、冒頭で述べたようにアイデンティティの形成には、所属集団とのコミュニケーションやコミュニケーションによって形成される他者との関係性も関連すると考えられる。よって、アイデンティティの形成には様々な要因が関与していることが考えられる。聴覚障害者のアイデンティティ形成に関連する要因については次にまとめる。

## 2-2. ろう者としてのアイデンティティと関連要因に関する研究

これまでの研究では、ろうアイデンティティの形成についてだけではなく、関連要因についても検討されている。これまで、ろう者のアイデンティティ形成に大きく影響を与えたと考えられてきた、同障者との関わり、教育歴、コミュニケーション手段の3つを中心に述べることにする。

ろう者としてのアイデンティティの発達を促進する要因として、親がろう者であることやまわりにろうの友人いること、成人ろう者との出会いのように同障者との関わりが重要と言われてきた(山口, 2001)。甲斐・鳥越(2006)でも、家族に聴覚障害者がいることで、聞こえない人や手話とのかかわりができるため、ろうアイデンティティの形成を促進する可能性があると報告されており、健聴者が親や教師のような大人を同一化の対象として成長するのと同じように、聴覚障害者にとっても自分のロールモデルとなる同障者また

は聴覚障害のある親の存在は、アイデンティティの形成において重要となると考えられる。

教育歴に関する研究では、島根・井上(2010)にて、ろう者としてのアイデンティティを形成する者と難聴者としてのアイデンティティ形成する者で教育歴に違いがあるかを検討している。難聴者としてのアイデンティティを形成する者は、一貫してろう学校に通っていた者も地域の学校に通っていた者もいたが、ろう者としてのアイデンティティを形成した者の多くは一貫してろう教育を受けてきていると報告している。よって、教育歴による違いが聴覚障害者のアイデンティティ形成に影響を与えていることが考えられる。岩田(2001)は、地域の学校に在籍する聴覚障害児とろう学校に在籍する聴覚障害児のアイデンティティの形成が異なることをそれぞれの社会性の発達の違いを理由に説明している。ろう学校に通う者と地域の学校に通う者では、仲間集団への参加の度合いのちがいによって社会性の発達が異なるという。その理由として、ろう学校であれば聴覚障害者の友人と互いに理解のできる手話等でのコミュニケーションが可能であるが、地域の学校だと健聴者集団との音声言語のみでのコミュニケーションが求められるため、満足にコミュニケーションができていないことがわかっている。このような他者との関係づくりの違いが聴覚障害者のアイデンティティ形成に大きく影響を与えていると考えられる。

また、地域の学校からろう学校かだけではなく、地域の学校とろう学校の両方を経験した聴覚障害者についても検討されている研究が多い。

普通学校とろう学校の両方を経験した者のアイデンティティ形成について、島根・井上(2010)では、自分が何者かを決めるのに悩み、葛藤する経験をもつ者が多く、未だに悩んでいる者もみられた。彼らは、健聴者集団と聴覚障害者集団の両方を経験したからこそ葛藤に出くわしていることが考えられる。また、葛藤後はろう者として生きていこうとする者が多いという結果から、最初に音声言語を獲得していたり、地域の学校とろう学校両方を経験したことのある者は健聴者の世界との葛藤や悩みから、ろう者として生きていくことを選択することが考えられる。山口(1997)では、聴覚障害者としてのアイデンティティを形成する者は「健聴者には聴覚障害者のことを理解してもらえない」と思うことで、聴覚障害者として生きていこうとすることがわかっており、健聴者世界との葛藤がろう者として生きていくことを選択させるといふ考えを示唆するものである。しかし、簡単にろう者集団に参加できるわけではなく、ろう者として生きるためには手話を含むろう文化を肯定的に受け入れ、使用することが求められる(山口, 2001)。それまで音声言語でコミュニケーションしてきた者のなかには、手話の使

用に戸惑い、ろう者の世界に入れずにいる者が存在することも考えなくてはならない。

### 2-3. ろう者としてのアイデンティティと難聴者としてのアイデンティティ

ここまで、ろう者としてのアイデンティティとその関連要因について先行研究をまとめてきた。聴覚障害者が形成するアイデンティティは、これまで健聴者かろう者かの二者択一で考えられてきたことがわかる。しかし、冒頭でも述べたように、聴覚障害者全てがろう者というわけではなく、聴覚障害者は「ろう者」と「難聴者」に分類できる。そしてむしろ難聴者の方が多いといわれている(滝沢(1995), 岩田(2007))。たしかに、ろう学校に通っていた聴覚障害者は自分を聴覚障害者だと小さいころから認識して育つだろうし、地域の学校に通い、音声言語でのコミュニケーションを主とする聴覚障害者は自分を健聴者として育つ可能性は高く、周囲に健聴者しかいない世界で自分を「ろう」と認識できるとは考えにくい。しかし、必ずしも聴力レベルや教育歴でろう者か難聴者が分かれているわけではなく、青年期に改めて「自分が何者か」を考えると、それぞれが自身をろう者か健聴者か、健聴者か難聴者か、はたまた難聴者かによって一人一人が形成するアイデンティティは異なると考える。よって、聴覚障害者が健聴者かろう者かだけではなく、難聴者としてどのようにアイデンティティを形成するか考える必要がある。しかし、「難聴者」のアイデンティティについては、「第三者」という健聴者とろう者の間の中途半端な世界(上農, 2003)と考えられており、どのような難聴アイデンティティをもつかという検討をした研究は少ない。

### 3. 難聴者としてのアイデンティティ形成に関する研究

聴覚障害者が難聴者としてアイデンティティを形成するには、健聴者でもろう者でもないどっちつかずの周辺的存在としての自分を受け入れなければならないといわれている。健聴者のように喋れても健聴者ではなく、ろう者と同じように聞こえなくてもろう者に属することができないことが難聴者の悩みとなるという報告があり(滝沢, 1995)、健聴者やろう者になりたくてもなれないというもどかしさをもちながら難聴者であるという自分を認識していくことが考えられている。

岩田(2007)は、「難聴者のアイデンティティの所在における大きな問題は、重度の聴覚障害がありながら、聴覚活用を中心とした生活を送ることを目標にして努力をし続ける人々である」と述べている。このような難聴者は、コミュニケーション困難の問題を努力

で克服できなくなった場合、無気力、対人不安など、心理的な病に陥ることがある。また、難聴者の中には、軽度・中度の聴覚障害で聴覚活用が可能であるため聴者の価値観に近いアイデンティティを求める人々もいれば、重度の聴覚障害があるためろう者の価値観に近いアイデンティティを求める人々もいる。また、聴覚障害が中度から重度・最重度となっていくに従い、手話のコミュニティを求めるように生活や心理的状況が変化し、難聴者からろう者のアイデンティティに移行していった聴覚障害者もいるだろうと述べている。

島根・井上(2010)は、難聴アイデンティティを形成する要因を検討するために質問紙調査を行っている。ここでは、難聴者アイデンティティをもつ者は、幼少期から音声言語を獲得し、一貫して普通学校に在籍経験のある者が多く、この半数は自分の属性について葛藤経験をもっているという結果が得られている。

これらより、ろうアイデンティティの形成における健聴世界との葛藤(山口, 1997)と同様に難聴アイデンティティを形成する際にも健聴者の世界との葛藤が生じていることが考えられる。しかし、葛藤が生じることが必ずしも否定的な自己形成につながるわけではなく、葛藤したうえで、肯定的に難聴者として自己を認識していく者もいる。肯定的に難聴者としての自分を認識できるということは、これまで考えられてきたような中途半端な存在としての難聴者ではなく、一つの「難聴者」という世界の一員として自己を形成していると考えられるのではないだろうか。

藤邑(2002)は、難聴者に障害に対する認識や対人関係、コミュニケーション手段に対する意識について問う面接調査を行い、難聴者の障害受容過程を検討している。そこでは、「健聴者とろう者との中間で曖昧な存在」から「音のある世界と無い世界とを移行可能な存在」というように自己を肯定的に認識していった事例が検討されており、肯定的な難聴アイデンティティが聴覚障害者の世界に存在していることが示唆されている。また、この事例において、肯定的な自己形成が可能となるために重要であったこととして、「同障者との出会い」が挙げられている。同障者との出会いは、ろうアイデンティティを形成するうえでも重要とされているが(山口, 2001)、難聴者がアイデンティティを形成するうえでも重要な役割を果たすと考える。また、同障者との出会いに加えて、聴覚障害のある自分を認識しながらも健聴者集団のなかで他者と円滑なコミュニケーションができること、理解ある健聴者によるサポートにより、Glickman and Carey (1993)の二分化段階のような難聴者の世界も聴者の世界も肯定的に受容できる統合アイデンティティをもつ者もいると考えている。

#### 4. 結語

「難聴者として自己を形成し生きていく」ことは、これまで健聴者の世界とろう者の世界との境界を生きていることであると言われてきており、否定的なイメージが強い。しかし、軽度聴覚障害者には、音声言語のみでコミュニケーションが可能であり、手話に対して慎重な姿勢をみせる人もいるが、自分を健聴者としてではなく難聴者としてとらえ、肯定的に自己を形成する者がいることがわかっている(藤邑, 2002)。

また、近年、デジタル補聴器や人工内耳という聴覚補償機器の開発が進められている。重度聴覚障害者の中には補聴機器を活用し言語コミュニケーションを行うことが可能な者が増え、難聴者として生きられるようになってきている。このような聴覚補償により、「難聴者」としての自己を形成し、生きている聴覚障害者もいると考えられる。よって、「難聴アイデンティティ」がどのように形成されるのかを検討する予知はあると考える。検討していくうえでは、ろうアイデンティティと同様に、「難聴アイデンティティ」との関連要因についても検討すべきと考える。山口(1997)のような健聴者世界との葛藤やろう者世界との葛藤は起こり得ると考えるし、島根・井上(2010)が報告したように、教育歴やコミュニケーション手段によっても聴覚障害者のアイデンティティの形成は違いがあることが考えられるからである。以上より、今後は難聴アイデンティティの形成過程やこれに関連する要因について海外の研究を交えながら検討していきたいと考えている。

#### 引用文献

- 伊藤泰子(2008)聞こえない人のアイデンティティ. 名古屋市立大学大学院人間文化研究科,10,201-215
- 井上眞理子(1982)E・Hエリクソンにおけるアイデンティティ概念の形成過程.ソシオロジ,27(2) 1-19
- 岩田吉生(2001)聴覚障害青年のアイデンティティ形成に関する一考察.治療教育学研究,21,43-48
- 岩田吉生(2007)聴覚障害教育と手話,特集・視聴覚障害とそだち.そだちの科学・第9号, 97-102.
- 上農正剛(2003)たったひとりのクレオール-聴覚障害児教育における言語論と障害認識-.ポット出版,
- 小田侯朗(2000)本研究における「障害認識」の基本的位置づけおよび本書の構成.一般研究報告書「聴覚障害児の障害認識と社会参加に関する研究-様々な連携と評価を中心に.研究課題解説.国立特殊教育総合研究所,1-4
- 甲斐更紗・鳥越隆士(2006)ろう学校高等部生徒のアイデンティティに関する研究.特殊教育学研究,44

(4) 209-217

- 鹿取廣人・杉敏夫・鳥居修晃 (2015) 心理学[第5版].  
東京大学出版会
- 久保田まり (2013) 発達における「自我同一性」概念  
の再検討: 「同一性」と「同一化」概念をめぐって.  
東洋英和大学院紀要, (9) 69-76
- 島根陽平・井上清子 (2010) 聴覚障害者における聾(ろう)  
と難聴のアイデンティティ・デフ・アイデンテ  
ィティ形成の過程と要因. 生活科学研究, 32, 27-35
- 滝沢広忠 (1995) 聴覚障害者の心理的諸問題-中途失  
聴・難聴者のこころの悩みに関する調査から-. 札  
幌学院大学人文学部紀要, 58, 23-36
- 鑪幹八郎 (1990) アイデンティティの心理学. 講談社  
現代新書
- 鳥越隆士 (1999) ろうと文化. 中野善達・吉野公喜(編).  
聴覚障害の心理, 第9章. 田研出版, 157-171
- 中野聡子 (2012) 聴覚障害者のアイデンティティ・ト  
ラブル. 中邑賢龍・福島智(編) バリアフリー・コ  
ンフリクト-争われる身体と共生のゆくえ-, 第9  
章. 東京大学出版会, 197-216
- 藤邑正和 (2002) 難聴者の障害受容過程に関する一考  
察. ろう教育科学, 44 (1), 13-23
- 山口利勝 (1996) 聴覚障害学生における自己意識形成  
および現在の自己意識とアイデンティティ形成と  
の関連についての研究. 広島大学教育学部紀要第  
一部 (心理学), 45, 139-144
- 山口利勝 (1997) 聴覚障害学生における健聴者の世界  
との葛藤とデフ・アイデンティティに関する研究  
-教育心理学研究, 45, 284-294
- 山口利勝 (2001) ろう者のアイデンティティ発達. 心  
理臨床学研究, 18 (6), 557-568
- 脇中起代子 (2009) 聴覚障害教育これまでとこれから  
-コミュニケーション論争・9歳の壁・障害認識を  
中心に-, 北大路書房